

種生物学会 ニュースレター

THE SOCIETY FOR THE STUDY OF SPECIES BIOLOGY

NEWSLETTER

April 2003

目次

| | |
|-----------------|-----|
| 新和文誌編集委員長あいさつ | 1 |
| 第34回種生物学シンポジウム | 2 |
| プログラム・ポスター発表の記録 | 2-4 |
| シンポジウム体験記 | 4-5 |
| PSB 編集報告 | 6 |
| 和文誌編集報告 | 6 |
| 総会報告 | 7 |
| 会計報告 | 8 |
| 書評 | 10 |
| 会員異動 | 11 |
| 国際シンポジウム 2003 | 12 |

熱いシンポジウムが良い本をつくる：

発展する和文誌「種生物学研究」シリーズの出版事業にご理解とご協力を

編集委員長 西脇亜也（宮崎大）

先の総会において川窪前和文誌編集委員長から委員長を交替いたしました西脇です。伝統ある「種生物学研究」の編集を引き継がせていただくことになり、その責任の重さを痛感しています。和文誌から「種生物学研究」の名前を削り、シンポジウム企画とも独立した単行本出版事業としてはどうかと言う意見もありますが、私はむしろ、今までよりも強くシンポジウムと連動し、発展しつづける「種生物学研究」シリーズ出版を目指すべきだと考えています。この挨拶文では、私なりに和文誌の歴史をふり返り、今後の進むべき道を展望することを試みたいと思います。

私が学生だった20数年前には、「種生物学研究」は、最も先進的で魅力的な印刷物の一つでした。私のように、身近な会員の会誌をコピーした海賊版の「種生物学研究」を持ってむさぼり読んだ学生も多

かったように思います。最近でこそ、分類学、生態学、進化学関連の学会、研究会、シンポジウムが盛んに開催されるようになりましたが、当時はあまり多くなかったのです。和文誌は、この分野の裾野を広げることに大きな役割を果たしてきました。

しかしながら、他の集会が行われ、若手の出席割合が減少するにつれて「種生物学研究」の求心力は失われてゆきました。「書いても業績にならない雑誌に何故書かねばならないのか？」との言葉に象徴されるように、シンポで良い発表があっても和文誌に印刷されず、そのため、さらに読まれなくなる悪循環があったのかもしれない。それでも「種生物学研究」は、歴代の編集委員長らのご努力により大変魅力的な雑誌として頑張ってきたと私は思っています。

そんな中、1998年2月の歳王シンポから就任した

川窪前委員長は、矢原前会長とともに和文誌出版の大改革を行いました。つまり、以前までの雑誌スタイルでの出版をやめて、単行本として出版し、一般の書店でも販売することを提案したのです。和文誌が、かつてのような魅力を取り戻すには、今までとは異なる思い切った行動が必要だと考えたのでした。当然ながら反対意見もあったと聞きますが、川窪委員長の熱意に負けて、結局はやってみることにになりましたが、こんな冒険をする学会は他には見あたりません。

その後は会員の皆様もご存知の通りで、現在までに3冊の単行本としての和文誌が刊行されました。今後刊行予定の本も編集作業が進んでいます。多くの方々の努力によって文一総合出版との共同出版事業がなんとか軌道に乗ってきたのです。かつて和文誌が学会員だけに配布されていた頃に比べて数倍の部数が書店に並び、会員内外の多くの方々、特に若い学徒に読まれています。種生物学会が、社会に情報発信するチャンネルが大きく開かれたと言えるでしょう。

さて、今後の出版事業では、単行本としての和文誌を、年間予算の枠を守りながら良い本となるよう

編集し1年に1冊の出版スケジュールを守りたいと思います。実は、このことの難しさは、私も「森の分子生態学(第23号)」の責任編集者の際に身にしみ感じていました。定期刊行物として出版できなかった3冊の経験を生かして、今後はしっかりと進めてゆきたいと思います。

ネタ切れや、書き手不足を心配する声も聞きますが、私は、この学会には必要な人材が揃っていると思っていますので、そんなに心配していません。

これからも、魅力的な企画が次から次へと立ち上がり、熱いシンポジウムが開催されると思います。なんと言っても、この学会の魅力は合宿形式でのシンポジウムでしょう。そして、その内容を元に編集された、魂のこもった本が出版されると思いますが、そのためには、会員の皆様の力強いご支援が必要です。学会員全てが出版に参画する本づくりが理想ですが、シンポジウムの盛り上がりによっては可能です。良いシンポジウムが良い本を産むのです。

どしどしご意見やアイデアをお寄せ下さい。シンポジウム企画の提案など大歓迎です。今後とも、単行本出版の和文誌「種生物学研究」をよろしく願います。

第34回 種生物学シンポジウム

開催期間 2002年12月13日(金)～12月15日(日)
会場 ACTY PLAZA 琵琶

昨年師走、琵琶湖のほとりで第34回種生物学シンポジウムが開催されました。プログラムとポスター発表の記録を掲載します。また、若い研究者お二人がシンポジウム体験談を寄せてくださっています。

■プログラム

□12月13日(金)

プレシンポジウム

「植物の種の比較生物学－研究の現状と問題点を探る－」

河野昭一(京大名誉教授)

□ 12月14日(土)

シンポジウム1

「ユリ科の種生物学-分子情報を用いて系統分類, 植物地理を再考する-」

オーガナイザー: 田村 実 (大阪市大)、河野昭一 (京大名誉教授)

- 1) 広義ユリ科の分子系統と多様性 田村 実 (大阪市大)
 - 2) The phylogeny and phytogeography of the Liliaceae *sensu lato* from the aspects of morphology and anatomy Frederick H. Utech (Carnegie Mellon Univ.)
 - 3) スズラン科の分子系統と形質進化 山下 純・田村 実 (大阪市大)
 - 4) カタクリ属 (ユリ科) の分子系統と植物地理
吉田誠治 (兵庫県立太子高校)・林 一彦 (大阪学院大)・河野昭一 (京大名誉教授)
 - 5) ユリ属 (ユリ科) および近縁属の分子系統と生活史
林 一彦 (大阪学院大)・河野昭一 (京大名誉教授)
 - 6) ショウジョウバカマ属 (シュロソウ科) の植物地理と種維持機構
布施静香・田村 実 (大阪市大)
 - 7) 日本とその近隣地域産ソクシンラン (キンコウカ科ソクシンラン属) の遺伝的多様性と植物地理
近藤久美・田村 実 (大阪市大)
- まとめと総合討論のポイント 河野昭一 (京大名誉教授)
生活史の視点からのコメント 大原 雅 (北海道大)
キク科の植物地理との対比によるコメント 副島顕子 (大阪府大)
総合討論

□ 12月15日(日)

シンポジウム2

「新参者の種生物学: 帰化植物, 抵抗性雑草, 組換え作物を材料として」

オーガナイザー: 芝池博幸 (農環研)、浅井元朗 (中央農研)

1. 帰化植物の部 座長 三浦励一(京大)
 - 1) 外来雑草の蔓延: イチビの侵入経路 黒川俊二 (畜草研)
 - 2) 麦圃に侵入するカラスムギ: 出芽の不斉一性という生き残り戦略 浅井元朗 (中央農研)
 - 3) 野生化する牧草: エンドファイト (共生微生物) を利用するネズミムギ 山下雅幸 (静岡大)
 2. 抵抗性雑草の部 座長 伊藤一幸(東北農研)
 - 4) 水田雑草におけるスルホニルウレア系除草剤抵抗性 内野 彰 (東北農研)
 - 5) 抵抗性個体の発生様式: アゼトウガラシの場合 芝池博幸 (農環研)
 - 6) 雑草から作物へ: 抵抗性遺伝子を活用した選抜技術の開発 清水 力 (クミアイ化学)
 3. 組換え作物の部 座長 澤田均(静岡大)
 - 7) 環境耐性作物の作出: 乾燥・塩・凍結に耐えるためのチューニング
伊藤裕介 1, 2, 篠崎一雄 3, 篠崎和子 1 (1 国際農研, 2 科技団, 3 理研)
 - 8) 花粉飛散を見極める: キセニアを活用した系から 松尾和人 (農環研)
- 総合討論 座長: 西脇亜也 (宮崎大)

■ ポスター発表プログラム

- P-1 葉の存在が風媒の受粉効率を高めるのか? アキニレにおける摘葉試験から 野村尚史(京都大院・生態研センター)
- P-2 チガヤ2種の交配隔離機構の検討:交配前隔離と交配後隔離の有無 水口亜樹・西脇垂也(宮崎大・農)
- P-3 異型花柱性植物サクラソウにおける花粉流動 石濱史子(東京大・総合文化)・上野真義(森林総研)・
川上美穂子(東京大・農)・津村義彦(森林総研)・鷺谷いづみ(東京大・農)
- P-4 チシマゼキショウ属(チシマゼキショウ科)の分子系統(予報) 石井孝明・田村実(大阪市大院・理)
- P-5 三倍体オニユリの遺伝的分化 尾崎良子・比良松道一・尾崎行生・大久保敬(九州大・院・農)
- P-6 老齢照葉樹林におけるウラジロガン種子の父性解析
中西敦史(名古屋大院・生命農)・戸丸信弘(名古屋大院・生命農)・吉丸博志(森林総研)・
河原孝行(森林総研)・真鍋徹(北九州市自然史博)・山本進一(名古屋大院・生命農)
- P-7 シデコブシの個体群構造とクローン形成 鈴木節子(名古屋大・生命農)・戸丸信弘(名古屋大院・生命農)・
石田清(森林総研)・山本進一(名古屋大院・生命農)
- P-8 蛇紋岩遺存の絶滅危倶種オゼソウの遺伝的多様性と、空間遺伝構造
富松裕・大原雅(北海道大・地球環境)・
保谷彰彦(東京大・総合文化)・高橋英樹(北海道大・総合博物館)
- P-9 他殖性穀類トウジンビエにみられる特異な作物-雑草複合
三浦勘一(京都大・農)・寺内良平(岩手生物工学研)
- P-10 外来種タンポポはなぜ少ないのか? 保谷彰彦(東京大院・総合文化)・芝池博幸(農環研)・
森田竜義(新潟大・教育)・伊藤元己(東京大院・総合文化)

シンポジウム体験記 その1

山岸洋貴 (北海道大学大学院地球環境科学研究科生態遺伝学講座博士課程1年)

第34回種生物シンポジウムは、日本一の琵琶湖の湖畔でユリ科の種生物学・新参者の種生物学ということで全国各地から参加者が集まり3日間の日程でおこなわれました。私は今回が初めての種生物学会のシンポジウムだったのでワクワクしつつも少し緊張して参加しました。14日は前日の河野先生のプレシンポジウムや飲み会などの余韻も残りつつ、参加者が打ち解けた雰囲気の中始まりました。ユリ科の種生物学—分子情報を用いて系統分類、植物地理を再考する—ということで最初は少しマニアックなシンポジウムである印象がありましたが、実は私もユリ科を研究材料にしていることもあり、また諸先輩方の研究を聞くことができるこの機会をととても楽しみにしていました。午前中よりユリ科の分子系統と形質進化や植物地理などの研究発表が中心に話が進められていきました。分子系統の話について素人な私はただただなるほどと感心させられ、同時に自分の不勉強さを痛感させられました。このようなことは私のような未熟者だけなのかもしれませんが、ある1種についての生活史や生態について調査し研究すると、研究が進展するに連れてどんどん視野が狭くなりがちになります。そうすると、たとえば研究のヒントとして、その植物が辿ってきた進化の過程やその近縁種について考察する、などといったことをつい忘れがちになるような気がします。今回の学会に参加し、自分があまり知識のない分子系統の研究発

表にどっぷり浸れたことは視野を広げる大切さをあらためて感じさせてくれました。また今回、アメリカからわざわざ来られた Frederick H. Utech さんのお話も聞くことができ、ユリ科という植物で国境を越えた交流ができ、今後もぜひこのような機会を作っていただけたらと思いました。最後にユリ科との対比でキク科の植物地理についての発表がありました。私にはなじみの薄いキク科の植物地理について少し知ることができ、またユリ科を更に知るという意味でもとても有意義だったと思います。夕方にはポスター発表がありました。発表の多くは、研究に何らかの遺伝的な手法が使用されており、時代の流れをあらためて感じることができました。同じようなことに興味をもった研究者が集う種生物学会らしく、私にとっては興味深く今後の研究のヒントを頂けたと思います。ただ少しポスター会場が狭く、欲張りな私にはすべての発表者の話が聞けることができず心残りでしたが・・・夕食会も終わり、そろそろ懇親会に突入というところで九州大の矢原先生がポスター会場の一角でミニ講演会?を開かれ、たいへん興味深いお話を聞かせてくださりました。こういうことがあるのはやはり合宿形式の学会だからこそだと思いました。その後の懇親会ではわずかではありますが他大学の学生さんたちと談笑したりお互いの研究室事情を話したりで楽しいひとときを過ごしました。

私は今回始めて出席させていただいたので前回までの事情はよくわかりませんが、全体的に私のような学生が少ない印象がありました。こんなにいい機会はなかなかないのでぜひ、全国に多数いる学生さんたちにも出席することを勧めたいと思います。

『温故知新』という言葉がありますが、種生物学会は若手研究者にとってまさにこの言葉がぴったり合うそんな学会だと思います。大先輩たちと、気軽に研究について話し合い、食事会や飲み会では普段減多に聞くことのできない研究のエピソードや叱咤激励をいただける機会が

あります。くどいようですがこんなことはそうはないはずです。

もう数十年も前から出席されているある先生が、「若手の研究者だった頃に知り合った人たちがこうして年がたっても付き合いがあって、そして皆立派な現役研究者として活躍されている。」と話してくださいました。私も数十年後同じようなことを後輩たちに話せたらと、ついそんなことを思わせてくれた貴重な学会でした。ありがとうございました。

シンポジウム体験記 その2

新田みゆき（農業生物資源研究所）

種生物シンポジウムに参加するのは今回が2度目である。前回は2年前の、八王子で開催された生理生態学がテーマの時であった。中身の濃い発表と充実した講論、懇親会では大御所も若手も構えることなく話ができる独特な空気が漂い、以来種生物学会のことが忘れられずにいた。今私は遺伝資源を保存する仕事に携わっている。大学時代とほとんど同じ課題を続けているが、大学と違うのは、研究がもたらす利益は何か、誰もが理解できる答えを用意しておく必要があるように思われる点である。私は私なりの意見を持っているが、農林水産省では遺伝資源は、育種素材とみなされることが多く、周回と議論が噛み合わないこともある。このような環境に身を置いて数ヶ月が経ち、少々酸欠を感じ始めていた。それで、外の空気が吸いたくてたまらず、ことさら期待を胸に琵琶湖のほとりに足を運んだ。

課題として特に私が興味を寄せていたのは、2日目の「新参者の種生態学：帰化植物、抵抗性雑草、組換え作物を材料として」であった。

「帰化植物の部」では、黒川俊二さんは「外来雑草の蔓延：イチビの進入経路」で、100年以上前の押し葉標本を利用して、形態形質と核と葉緑体の遺伝マーカーから、イチビには一つの栽培型と二つの雑草型があり、雑草型は戦前と現在とで主要な型が入れ替わったことを示した。浅井元朗さんの「麦圃に侵入するカラスムギ：出芽不斉一性という生き残り戦略」では、ほとんどカラスムギで占められた北関東の麦畑に驚かされた。なぜ北関東だけで被害が出るのか。この原因について浅井さんは出芽特性に着目して分析し、全国で北関東でのみ夏に湛水しない畑で麦が栽培されていることを挙げ、カラスムギ集団では出芽が非常に不斉一であるため、麦播種前に除草剤を散布しても根絶できないことを示した。山下雅幸さんの「野生化する牧草：エンドファイト（共生微生物）を利用するネズミムギ」では、エンドファイトの感染で付加される耐虫性や耐病性を利用するために、感染系統が緑化用などで導入されているが、自生するネズミムギ集団に近年感

染個体が多く含まれるようになってきたことが分かり、集団の多様性を低下させる恐れがあるとの警鐘を鳴らした。

「抵抗性雑草の部」で、内野彰さんは「水田雑草におけるスルホニルウレア系除草剤抵抗性」で、SU剤抵抗性個体は感受性個体と比べて外見に差がなく出現を未然に防ぐような防除対策を講じる必要を説いた。芝池博幸さんは「抵抗性個体の発生様式：アゼトウガラシの場合」で、SU抵抗性が含まれるアゼト乳酸合成酵素（ALS）阻害剤抵抗性がALS遺伝子の非同義置換により生じ、この突然変異個体が圃場内で優占したのち近隣へと広がったことを示した。清水力さんは「雑草から作物へ：抵抗性遺伝子を活用した選抜技術の開発」で、PC剤という新規なALS阻害剤を開発し、イネの培養細胞にPC剤を添加することにより抵抗性の細胞の出現を誘発するとともに、初めてイネのALS遺伝子を単離することに成功した。

「組換え作物の部」の「環境耐性植物の作出：乾燥・塩・凍結に耐えるためのチューニング」で伊藤裕介さんは、複数のストレスに対して抵抗性をもたらす遺伝子を発見し、発現のしくみについて丁寧な説明があったが、もっと時間をかけて聞きたい話であった。最後の、松尾和人さんの「花粉飛散を見極めるーキセニアを利用した系からー」は、組換え作物からの遺伝子流動が問題になっているトウモロコシで、花粉親の粒の色が雑種第1代の粒の色になる現象を利用して花粉飛散距離を推定するという話で、分子マーカーを使わないで目的に応じた最適な方法を探す姿勢の大切さを改めて教えられた。

講演の内容は本にまとめられると聞いているが、講演中に使用されたポイントになる図表を講演要旨にもっと多く掲載してもらえたら理解が深められ、更に活発な議論となったかもしれない。それでも、種生物に集まる方々は、期待通り気さくな人好きの人たちが多く、違う空気を吸いに行き、研究のヒントや元気をもらいたいという当初の私の目的は十二分に果たすことができた。

PLANT SPECIES BIOLOGY

英文誌編集状況
原 登志彦

Plant Species Biologyの2002年1月から12月までの編集状況を報告します。受理論文総数は20編でした。内訳は、日本から12編、アメリカから6編、イタリアから1編、インドから1編でした。以上の受理論文から2編がVol. 17, No. 1 (2002年)に掲載されました。また、6編がVol. 17, No. 2&3 (2002年、合併号)に、5編がVol. 18, No. 1 (2003年)に掲載予定です。現在、3編が審査中ですが、残念ながら4編が却下されました。2001年の受理論文から5編とあわせて合計7編がVol. 17, No. 1としてすでに印刷され皆様のお手元にお届けしました。また、2001年の受理論文から1編とあわせて合計7編がVol. 17, No. 2&3の合併号として2002年12月に印刷され、まもなく皆様のお手元に届く予定です。現在、Citation IndexにPlant Species Biologyを登録すべく努力していますが、その登録の重要な条件に雑誌が定期的に刊行されることがあります。これまで、約4ヶ月(1号分)の刊行の遅れがあり、それを取り戻すべく、今回はVol. 17, No. 2&3の合併号とすることといたしました。今後、定期的にPlant Species Biologyを刊行すべく努力いたしますが、多くの会員の皆様からの投稿も必要不可欠ですので、よろしくお願いたします。

また、現在、Plant Species Biologyの編集部が中心となって、種生物国際シンポジウム「植物の繁殖様式の多様性：生態、進化そして環境保全 Diversity of Reproductive Systems in Plants: Ecology, Evolution and Conservation」を企画しています。会期は2003年10月16日(木)～17日(金)で、開催場所は札幌コンベンションセンター(札幌市白石区)です。C.G. Eckert クイーンズ大学教授をはじめ、約10名の海外からの招待講演者を含んだ口頭発表と、ポスター発表も計画していますので、多くの会員の皆様の参加を期待しています。近々、First Circularをお送りしますので、詳しくはそちらをご覧ください。

すきまCM

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を送り上げますので、電子メールで、ご所属・氏名・住所・書名を庶務幹事(shibaik@affrc.go.jp)までお知らせください。なお、書評は1年以内に掲載されますようご準備ください。

「現代人のための中学理科 新しい科学の教科書1」
執筆代表 左巻建男 文一総合出版

種生物学研究

和文誌編集委員会報告
川窪伸光

「種生物学研究」のさらなる躍進を願って

●先の総会では、以下の3点が議論を経て承認されました。

1. 出版遅延対策の確認と今後

次回出版の「光と水と植物のかたち」は「種生物学研究26・27合併号」とし、今後、年1回発行、出版時の全会員配布を継続することを確認した。この合併号発行によって、和文誌の発行遅延が、雑誌刊号上においては是正されることになった。

2. 文一総合出版との契約あるいは覚え書き

単行本出版事業も軌道にのってきたので、現在までの編集経験を生かして、文一総合出版と文書による契約を交わすこととした。内容は、基本的に一般出版物の契約書に準ずるもので、そこに学会と出版社の相互理解を確認するものとする。最終的な詰めは、学会執行部に一任される形で、早期に契約を取り交わす予定を確認した。

3. 和文誌「種生物学研究」編集委員長の交代

和文誌のさらなる発展のため、新編集委員長として西脇亜也氏(宮崎大)が推薦され承認された。

●さて、種生物学会和文誌「種生物学研究」を単行本化して出版する改革も、開始してから今年で満5年が過ぎようとしています。現在までに、「花生態学の最前線(種生物学研究 第22号)」、「森の分子生態学(23号)」、「保全と復元の生物学(24/25号)」の3冊が発刊され、現在、「光と水と植物のかたち(第26/27号)」、「植物の生活史(仮:28号)」の2冊の編集が進行中で、さらに「雑草の進化生態学(仮:29号)」の編集がスタートしています。

これらの単行本出版事業は、1988年に旧和文誌の諸問題を打開するために、矢原前会長のもと、和文誌編集委員が試行錯誤して進めてきました。しかし、委員長であった私の力不足で、大幅な出版遅延が生じ、結果的に、雑誌刊号の合併によって発行年度の是正を図らざるを得ない事態になってしまいました。会員の皆様には、ご迷惑、ご心配をおかけしてきたことを深くお詫びいたします。

幸い、種生物学会の単行本出版事業、それ自体は、学会内外でおおむね好評を得てきています。年1回の発行配本の見通しがたち、また、既刊はすべて重版がかかるようになりました。今後は、西脇亜也 新編集委員長のもと、「種生物学研究」は新たな飛躍が期待できます。和文誌編集委員会に、今後も、皆様のご理解、ご支援をよろしくお願いいたしたいと思います。

2002年度 種生物学学会総会報告

02年度種生物学学会総会は、12月14日に第34回種生物学シンポジウム会場において開催され、以下の報告事項、審議事項が幹事会から提案され、了承されました。その後の状況をふまえて、ご報告いたします。（会長：森田 竜義）

[報告事項]

1. 分類学会連合への加盟

02年1月11日に開催された分類学会連合設立総会に、私（森田）と芝池庶務幹事が出席し、今年の総会決定に基づき加盟しました。加盟学会は日本魚類学会、日本古生物学会、日本昆虫学会、日本シダ学会、日本生物地理学会、日本蘚苔類学会、日本藻類学会、日本動物分類学会、日本哺乳類学会、日本植物分類学会、日本菌学会、日本地衣学会など24学会で、代表に植物分類学会会長の加藤雅啓氏が選出されました。

2. 科学研究費「学術定期刊行物」へのPSB出版補助金の申請

00年度から3回目ですが、100万円の補助金申請を行いませんでした。残念ながら4月に入り、今回も不採択との連絡がありました。欧文誌の採択は申請件数156件に対し122件で、78.2%という比較的高い採択率にもかかわらず、不採択になった主要な理由はサイテーション・インデックス登録ができていないことにあると思われ、ISI-Web Scienceへの登録実現は焦眉の課題です。

3. ニュースレターは02年6月に24号、10月に25号を発行しました。

4. 学会のホームページを開設しましたので活用してください。URLは<http://sssb.ac.affrc.go.jp/>です。

[審議事項]

1. Blackwell-Asia社とのPSB出版委託契約の更新

02年5月に私（森田）と河野英文誌名誉編集委員長がブラックウエル社のRobertson社長、田中久仁美マネージャーと東京にて会合を持ちました。ブラックウエル社から委託出版に関する次のような提案がありました。これは従来通りの学会員数を維持することが前提です。

- 1) 1号当り84ページ、年間総ページ数252ページ(索引を含む)
- 2) 委託出版料を1ページ当り15,000円とする(378万円)
- 3) 海外メンバーへの郵送料は別に必要

上記の提案にもとづき、2003年度と2004年度のPSB委託出版契約更新をBlackwell-Asia社との間で行なうことを総会に提案し、了承されました。

2. 「種生物学研究」出版について

1) 川窪伸光さんから西脇重也さん(宮崎大学農学部)への和文誌編集委員長の交代が承認されました。5年にわたり委員長を勤め、「種生物学研究」の単行本化の推進、22号から24-25号の発行にご尽力いただいた川窪さん、ありがとうございました。

2) 委託出版料(50万円)を限度として、2003年度と2004年度の「種生物学研究」の委託出版契約を、文一総合出版との間で行うこと、発行年度のずれを解消するため、次号を「種生物学研究」26-27合併号とすることが了承されました。なお、今年の総会で、年に1号の定期発行を守ること、現会員に送付し過去にさかのぼらないことが確認されています。

(参考)

『花生態学の最前線』(種生物学研究第22号、98年度)2000年1月発行

『森の分子生態学』(種生物学研究第23号、99年度)2001年2月発行

『保全と復元の生物学』(種生物学研究第24号00年度、第25号01年度)2002年12月発行

『光と水と植物のかたち』(種生物学研究第26号02年度、第27号03年度)2003年発行予定

『生活史(題未定)』(種生物学研究第28号04年度)2004年発行予定

3. 03年10月に札幌においてPSB国際シンポジウム、2003を開催すること、第35回種生物学シンポジウムを03年12月に西日本(神戸)において開催することが了承されました。なお、国際シンポジウムは原登志彦英文誌編集委員長、大原雅・工藤岳副委員長など北海道大学の皆さん、種生物学シンポジウムは渡辺邦秋さん、小菅桂子さん、工藤洋さんなど神戸大学の皆さんにお世話いただきます。

4. 学会活動全般について

1) PSBへの投稿の促進

前述したように、投稿論文の拡大や科研費補助金の獲得のためにも、ISI-WebScienceへの登録実現は焦眉の課題です。登録のためには定期的な発行が必要条件となりますので、17巻の2号と3号を合併号とせざ

るをえなくなりました。しかしながら、依然として投稿論文数が少ないため定期発行が困難な状況です。18巻1号の入稿は3月初旬になり、約3ヶ月遅れでの出版は避けられそうにないとの連絡がブラックウエル社から来ています。2号の締め切りは3月18日でしたが未入稿の状態で、3号の締め切りが7月29日ですので、このままではまた合併号という事態になりかねません。国際シンポジウムの招待講演の掲載が可能だとしても、会員からの投稿がなければPSBの継続は困難です。Life history flora の掲載開始を河野先生に計画していただいています。会員のみなさんが「03、04年度に1本の投稿論文を」を合い言葉にがんばってくださいることを期待しています。

2) 財政問題の解決

前述のように18巻以降のPSB委託出版費をこれまでの480万円から400万円へと抑える努力をいたしました。また、17巻は合併号となりましたので、会員一人当たりの委託出版費が減額され（一般会員8,500→7,000円、学生会員8,500→6,000円、海外会員10,500→8,500円）、全体で3,833,500円となり、財政的には助かった面もあります。前納制がほとんど実現していないこと、引き続きかなりの会費滞納があることが大きな問題で、会費の口座引き落としも実行できる財政状態になっていません。執行部としてはこれらの解決に一層の努力を払ってまいりますが、会員の皆さんの御協力をお願いいたします。

会計 報告

2002年度会計報告

2002年の事業予算8,663,155円に対し、実施事業は8,720,378円でありほぼ予算に見合った規模となっている。

収入は、5,690,892円で予算の6,040,900円に達していない。大きな減収の原因は、会費収入と超過ページ収入の落ち込みにある。前者は海外会員の会費および購読料収入の落ち込みおよび会費の1年遅れの支払にある。後者は17巻の2号と3号の合併号(76ページ)により年間ページ数が180ページとなり、16巻の年間ページ数の246ページにおよばなかった事が一原因と考えている。一方、バックナンバーの売り上げと学術協会著作権およびPSBのRoyaltyは大きな収入の伸びを示し、PSBがネット上で良く読まれている事の反映と思える。また、バックナンバーは種生物学研究の販売が好調で売り上げは55万円程度あったが年度内の支払は40万円程度であった。

片岡基金利息繰入96,306円(2001年分)と2000年までの利子合計1,279,556円(この分は2001年度に一般会計の収入に繰込まれているので、紙面上には現れずに前年度繰越金3,029,486円中に含まれている。)の合計1,375,862円が一般会計に使用され、片岡基金本体1000万円と2002年分利息が特別会計(片岡基金)として残っている。

支出は、5,695,884円で予算の6,196,550円に達していない。予算を超えた項目は、PSB Vol.16(2001)の印刷費、ニュースレター郵送費、英文編集補助費、自然史学会連合分担金('01と'02年の2年分)、バックナンバー移送費(京大から大阪府吹田市への2tトラック2台分、ダンボール200箱の荷役)と販売の為のバック製本代(30冊分)である。しかしながら、和文誌(種生物学研究24/25号)出版費50万円および和文誌編集費5万円の支払いがなされていないことを考慮に入れると予算を超えていた。一方、ニュースレター印刷費は、紙代とインク代のみ、事務費は極限まで削減した結果これ以上に削減は不可能と考えている。

2003年度予算は、2002年度予算に準じて計上したが、支出の執行に当たっては、2002年度と同じ基準でおこなう。大きな問題は片岡基金本体の取崩しである。一方PSBの印刷費は400万円と以前の巻に比べ60-80万円の割り引き価格に交渉が成功した。

種生物学会2002年度会計監査報告(2002年1月1日-2002年12月31日)

| 収入の部 | | | 支出の部 | | |
|-----------|--------------|---------------|-----------------------|--------------|---------------|
| 項目 | 2002年度 収入 | 2002年度 予算額 | 項目 | 2002年度 支出 | 2002年度 予算額 |
| 会費 | 4,623,088 | 5,205,000 | 印刷費 | 17,986 | 60,000 |
| (02年分)一般 | | 4,680,000 | Newsletter(24,25) | 17,986 | 60,000 |
| (02年分)学生 | | 360,000 | 出版委託費 | 4,629,000 | 5,068,550 |
| 海外一般 | 19,384 | 165,000 | 2001年(PSB 16)出版 | 4,629,000 | 4,568,550 |
| 購読料 | 42,000 | 200,000 | 2002年(PSB 17)出版 | 0** | - |
| バックナンバー | 419,980 | 160,000 | 00-01年(24/25号)和文誌出版費 | 0** | 500,000 |
| 預金利子 | 95 | 900 | 02年(26号)和文誌出版費 | 0* | - |
| 学術協会著作権 | 48,656 | - | 発送費 | 192,420 | 195,000 |
| Royalty | 223,767 | 75,000 | Newsletter(24,25号)郵送費 | 91,300 | 45,000 |
| 片岡基金利息分繰入 | 96,306 | - | 00-01年和文誌郵送費 | 101,120 | 150,000 |
| 片岡基金取崩繰入 | - | - | 事務費 | 168,678 | 400,000 |
| 超過ページ代 | 237,000 | 400,000 | 和文誌編集 | 0** | 50,000 |
| | | | 英文誌編集 | 121,503 | 250,000 |
| | | | その他 | 43,899 | 100,000 |
| | | | 英文誌編集補助 | 384,000* | 250,000 |
| | | | シンポジウム補助金 | 100,000 | 100,000 |
| | | | 自然史学会連合分担金 | 40,000a) | 20,000 |
| | | | 会計監査交通費 | - | 3,000 |
| | | | バックナンバー移送費 | 110,250 | 100,000 |
| | | | バックナンバー製本代 | 53,550 | - |
| 小計 | 5,690,892 | 6,040,900 | 小計 | 5,695,884 | 6,196,550 |
| 前年度繰越金 | 3,029,486 | 2,622,255 | 次年度繰越金 | 3,024,494 | 2,466,605 |
| 合計 | 8,720,378 | 8,663,155 | 合計 | 8,720,378 | 8,663,155 |

一般会員: 415名(+5名)

* 出版されず

学生会員: 66名(-4名)

** 次年度まわし

海外会員: 33名

a) 01,02年分

国内機関購読: 17名

計 531名(+1名)

種生物学会2003年度予算(2003年1月1日-2003年12月31日)

| 収入の部 | | | 支出の部 | | |
|-----------|--------------|-------------|-------------------|--------------|-------------------------|
| 項目 | 2003年 予算額 | 2002年 収入 | 項目 | 2003年 予算額 | 2002年 支出 |
| 会費 | 5,500,000 | 4,623,088 | 印刷費 | 60,000 | 17,986 |
| (03年分)一般 | 4,560,000 | | Newsletter(26,27) | 60,000 | 17,986 |
| (03年分)学生 | 390,000 | | 出版委託費 | 9,000,000 | 4,629,000 |
| (滞納分)一般 | 500,000 | | 2002年(PSB 17)出版 | 4,000,000 | 4,629,000 ¹⁾ |
| (滞納分)学生 | 50,000 | | 2003年(PSB 18)出版 | 4,000,000 | 0 ²⁾ ** |
| 購読料 | 200,000 | 42,000 | 2001,2002年和文誌出版費 | 500,000 | 0 ³⁾ ** |
| バックナンバー | 100,000 | 419,980 | 2003年和文誌出版費 | 500,000 | 0 ⁴⁾ * |
| 預金利子 | 100 | 95 | 発送費 | 345,000 | 192,420 |
| 学術協会著作権 | 50,000 | 48,656 | Newsletter郵送費 | 45,000 | 91,300 |
| Royalty | 250,000 | 223,767 | 2001,2002年和文誌郵送費 | 150,000 | 101,120 |
| 片岡基金利息分繰入 | 100,000 | 96,306 | 2003年和文誌郵送費 | 150,000 | |
| 片岡基金取崩繰入 | 2,000,000 | 0 | 事務費 | 500,000 | 168,678 |
| 超過ページ代 | 400,000 | 237,000 | 和文誌編集、発送 | 100,000 | 0 ³⁾ ** |
| | | | 英文誌編集 | 250,000 | 121,503 |
| | | | その他 | 150,000 | 43,899 |
| | | | 英文誌編集補助 | 250,000 | 384,000 |
| | | | シンポジウム補助金 | 100,000 | 100,000 |
| | | | 自然史学会連合分担金 | 20,000 | 40,000 ^{a)} |
| | | | 会計監査交通費 | 3,000 | 0 |
| | | | バックナンバー移送費 | | 110,250 |
| | | | バックナンバー製本代 | | 53,550 |
| 小計 | 8,600,000 | 5,690,892 | 小計 | 10,278,000 | 5,695,884 |
| 前年度繰越金 | 3,024,494 | 3,029,486 | 次年度繰越金 | 1,346,494 | 3,024,494 |
| 合計 | 11,624,494 | 8,720,378 | 合計 | 11,624,494 | 8,720,378 |

* 出版されず。 a) 01,02年分

** 次年度回し 1) PSB Vol.16

2) PSB Vol.17

3) 01,02年和文誌

4) 03年和文誌

書評

アクチャカヤ、バーグマン、ギンズバーグ著 (楠田、小野山、紺野訳):
コンピュータで学ぶ「応用個体群生態学—希少生物の保全をめざして」

(文—総合出版)

高田 壮則 (北海道東海大学)

ある一冊の本を読み終えたとき、タイトルとその内容との間に大きなギャップを感じるがよくある。それは外国映画を見たときによく起こる例のフラストレーションと同じだ。本書を一読した読者はきっと私と同じ気持ちになるのではないだろうか？だから、この本を読み終えた時、私は原著タイトルを探して、” Applied Population Ecology: Principles and Computer Exercises using RAMAS EcoLab 2.0”を確認した。やはりギャップは埋まらない。むしろ、邦訳には、RAMAS EcoLab 2.0というプログラミングソフトを売り込みたいという原著タイトルの嫌味が消えており、本書のもっている保全生態学的な視点が表現されている。とは言え、この本が個体群生態学の基本的な教科書であるという説後感を私は禁じ得なかった。

個体群生態学とは生物個体の数勘定の学問である。そのため、古くから数理モデルとは密接不可分の関係にあった。したがって、この本の「はしがき」にあるように、本書のねらいは、(1)個体群生態学の基本的な概念を説明すること、(2)数理モデルを用いて、さまざまな概念を組み上げる方法を提示すること、(3)モデルの仮定の意味、モデルの利点と限界を理解すること、にある。その意味では、個体群生態学において使用される数理モデルの基本的な教科書とも言えるだろう。そのため、1章では個体群成長を調べるための基本的な概念と基本モデルについて説明し、2章、3章では基本モデルの応用版として、それぞれ、自然変動、個体群密度による調節の機構(密度効果)について解説している。さらに4章以降では、個体群内部の構造が複雑になった場合について言及している。個体群の年齢構造に着目した場合のモデルは4章に、生育段階構造に着目した場合のモデルは5章に、集団間の移入・移入を考慮したメタ個体群構造については6章に詳説されている。最後の二つの章では、それらを総合して行われるべき個体群存続性分析(PVA; Population Viability Analysis)の考え方とその実際について(7章)、その分析に基づいた保全政策の意思決定と資源管理の方法について(8章)記されている。この章立ての

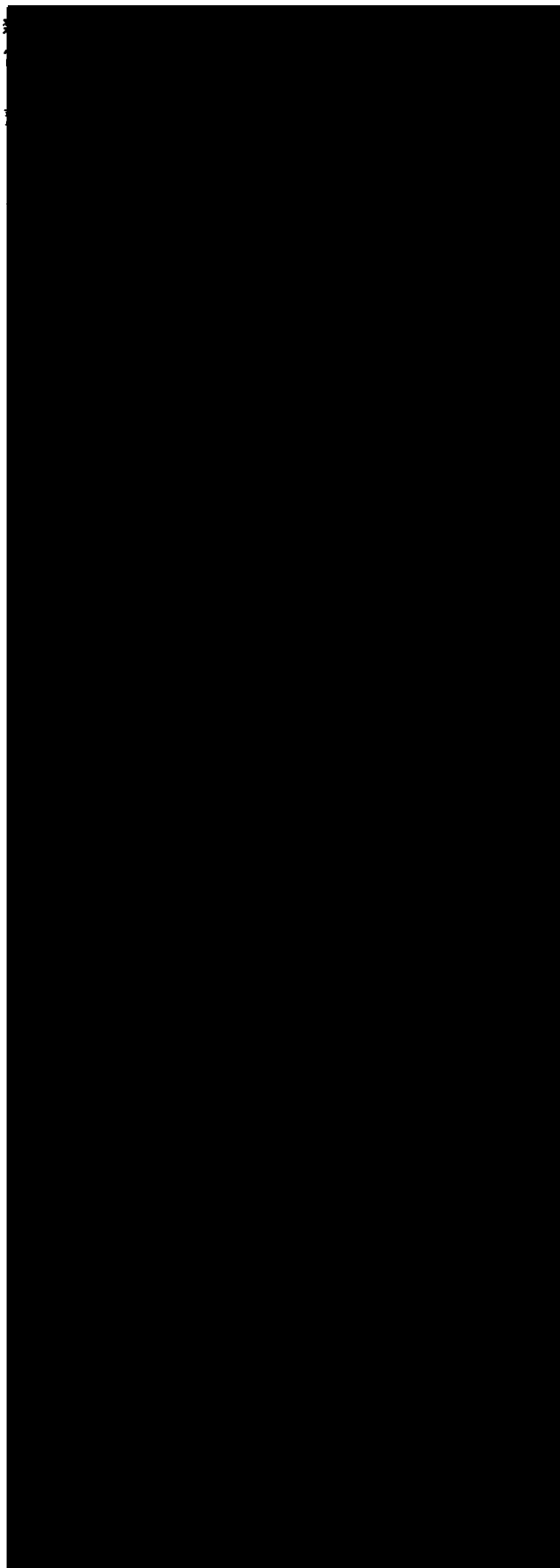
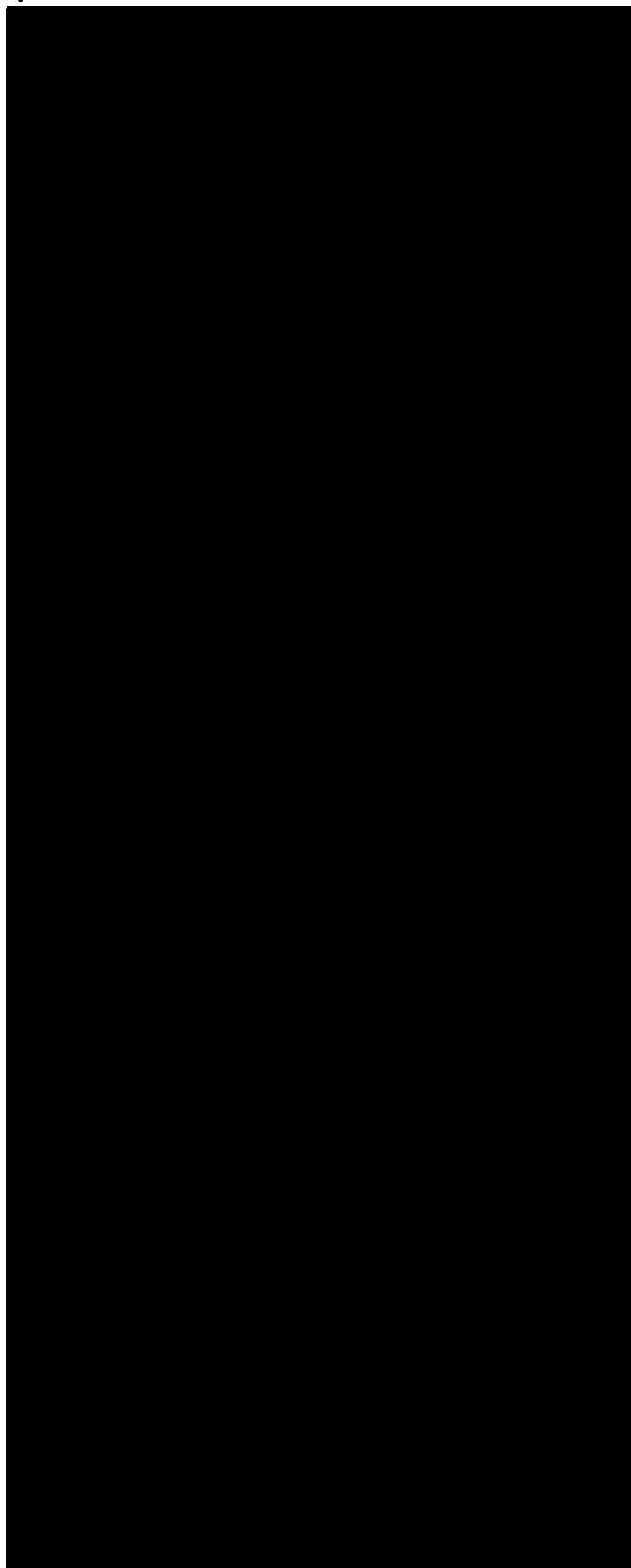
流れは、18世紀末に「人口論」の中で提案されたマルサスのアイデアに始まり、Shafferらによって1980年代に提唱された個体群存続性分析までの個体群生態学の発展の歴史を絵巻物にして見せられているかのようである。

十数年ほど前に、数理モデルの役割について同僚や生態学者の方々と議論した際、数理モデルをつくることは基礎理論や基礎概念をわかりやすく統一的に理解することに役立つという主張があった。確かに、言葉だけで語られた理論や概念は往々にして曖昧であり、その時には数理モデル化は難しい。その意味で、緻密で正確な基礎理論はモデル化に必要であるが、それだけではなく正しい理解にも不可欠なものである。本書は個体群生態学の理解に不可欠であると思われる基礎理論と概念を丁寧に解説していることによって、第一のねらいを見事に成功させている。すなわち、「指数成長」、「個体群増加率」、「感度分析」、「個体群調節」、「共倒れ競争」、「アリー効果」、「環境収容力」、「年齢構造」などなど、生態学の教科書なら必ず取り上げられている用語、さらに「環境的確率性」、「人口学的確率性」、「メタ個体群」など最近の発展にもなつて確立されつつある用語が、詳しく例を挙げながら解説されている。

また、数理モデルに関心のある研究者にとっては、マルサスモデル、ロジスティックモデル、推移行列モデルという基本的なモデルの作り方を勉強するために役立つ。モデルの解析方法について詳しく解説されていないという欠点があるが、2番目のねらいである「基礎理論に基づいてモデルを組み上げる方法」を学ぶことができる。特に、モデルの仮定の意味や限界など、モデルを作る際に初学者が気をつけなければいけない点が、2章3節をはじめとして随所にちりばめられている。これら二つの意味で、本書は教科書として成功している。

難を言えば、RAMASソフトウェアと密接に関連していること、「揺動」、「劣対角要素」、「自然変動」など2、3の訳語が耳慣れないこと、訳の生硬さなどがあげられるが、翻訳作業に関して言えば、非常に努力された労作であると評価して良いだろう。

会員
異動



国際シンポジウム 2003

PSB 国際シンポジウム 2003 を成功させましょう

種生物学会では、前回の国際シンポジウム（1999年、京都）から4年目にあたる今年の10月に国際シンポジウムを開催します。

シンポジウム名： Diversity of Reproductive Systems in plants: Ecology, Evolution and Conservation

開催場所： 札幌コンベンションセンター

開催日： 2003年10月16-17日（16日の午後はポスター、それ以外はオーラル、16日の夜にバンケット）

シンポジウムの内容：

Session 1: Mating systems and Pollination Biology-Plant strategies and Co-evolution.

Session 2: Molecular population Biology- Modern Approaches and Recent Progress.

Session 3: conservation Biology- Genetics, Demography and Viability of Populations.

D. イノウエ、C. エッケルト、K. リットランドなど第一線の研究者を招待講演者として迎えます。詳しくはこのニュースレターに同封したファーストサキュラーを御覧ください。世界の研究動向をつかむ貴重な機会であり、ポスターセッションは、若手研究者が自分達の研究成果を直接、世界の研究者に紹介するチャンスでもあります。学会員にとどまらずぜひ多数のみなさんが参加してシンポジウムの成功に御協力下さいますようお願いいたします。

会費納入のお願い

種生物学会の年会費は、前納制になっています。2003年度の会費は一般会員12,000円、学生会員6,000円です。まだ御納入いただけていない方はお振り込みいただきますようお願い致します。

会費納入状況は、PSBやニュースレターなどの送付封筒の宛名ラベル右下に完納年度を数字で示してあります。

(例)「-03」とあれば、2003年度分まで完納です。

(例)「-02」とあれば、2002年度まで納入されていますので、2003年度分12,000円（一般会費）をお支払いください。学生会費は6,000円です。

なお、2001年以前の一般会員費は10,000円、学生会員は5,000円です。

さらに、1999年度分までは年会費は一般会員8,000円、学生会員は5,000円です。

このほかにプラス記号「+」と数字が組合わされている場合があります。これは表示されている完納年度に余剰があることを示してあります。

(例)「-02 + 1万」とあれば、2002年度まで完納ですが、2003年度は1万円しか納入されていません。よって不足分の2000円をお支払いください。

会費納入状況をお確かめのうえ、下記の口座に不足金額を納入ください。

郵便振替番号：01030-3-21704

口座名義：種生物学会

(ご注意)

※今回表示されている納入状況は2003年3月末までの入金分です。入れ違いにお振込みいただいた場合には御容赦ください。

※郵便振替時の受領証は正式な領収証として認められます。できるだけ領収書発行の別個依頼は御遠慮いただければ助かります。

※発送作業の都合で完納されている方にも振込用紙が同封されています。次年度会費の納入にお使いください。御不明な点などございましたら、お手数ですが会計幹事まで御連絡ください。

電子メール：lilium@utc.osaka-gu.ac.jp ファックス：06-6382-5463

郵便：〒564-8511 吹田市岸部南2丁目36番1号1 大阪学院大学生物学研究室内 林 一彦

編集兼発行人 新潟市五十嵐二の町 8050 新潟大学教育学部生物学教室 森田竜麿
発行所 新潟市五十嵐二の町 8050 新潟大学教育学部生物学教室 種生物学会
学会ホームページ <http://sssb.ac.affrc.go.jp/>